

ベルギーと十勝

先月札幌市で駐日ベルギー大使主催の昼食会に参加した。在札幌ベルギー王国名誉領事に株式会社セコマの赤尾洋社長が就任したお祝いの会に呼ばれたものだ。予想以上に日本とベルギーとは経済的な結びつきが深まってきていることを知った。特に、南部のワロン地域は、かつて鉄鋼や石炭などの重工業で栄えた地域だったが、今では多くの先端産業が立地し、生命科学やITなどの分野で多くの日本企業が進出しているという。プレゼンテーションでは、ベルギーの産業政策の特徴が、企業間の密接な連携による新産業創出など、地域内ネットワークを活かした手法にあることなどが紹介された。

なぜセコマの社長がベルギーの名誉領事に就任したのか、その理由を隣席にいた大使館のスタッフに尋ねたところ、意外な答えが返ってきた。ビルデルリング駐日大使自らが名誉領事となるパートナー企業を北海道で幅広く情報収集し、地域の多彩な資源を活用して、コンビニだけでなく製造、物流まで幅広いサプライチェーンにより地域密着の産業を展開しているセコマの経営に着目したのだという。個人的なつながりによる縁ではなく、地域経済の活性化につながる戦略的な取り組みへの関心が契機となって生まれた名誉領事であることに正直驚いた。ベルギーは、フランス語圏、オランダ語圏、ドイツ語圏が混在する国であり、それだけに多様な文化を受入れ、それらを結び付けながら国の強みとして活かす産業戦略が展開されている。その考え方がセコマの経営戦略に共鳴したという図式に興味を覚えた。

地域に密着したコンビニチェーン、セイコーマートは多くの北海道民に支持されている。セコマの丸谷智保会長とは、講演会や経済団体の会議などでよくご一緒するが、その経営哲学には共感する部分が多い。小売り部門だけでなく、多くの地場産の製造業を展開し、そこから魅力商品を生み出し、さらに自前の物流センターを持って、安定した収益構造を作りだしている。さらに、それが過疎地への進出にもつながり、地域の共感を得るという好循環をもたらしている。地域の企業が人口減少という厳しい時代に生き抜いていくためには、パイの拡大よりも、地域全体が豊かになることを目指す大局的なビジネスモデルが大切だ。

丸谷会長のお父さんは元池田町長を務められ、町営で一村一品の先駆モデルとなる十勝ワインをつくりあげた方だ。後年、参議院議員になった丸谷氏とは、私が役人時代に、法案説明などでお会いする機会があった。本来の事前レクを忘れて、十勝沖地震災害、冷害で再建団体になった危機から、地域の住民に夢と希望を与える産業振興策として、ワインづくりに挑戦されたお話を夢中で聞いていたことを思い出す。その地域住民に向き合う精神は今このセコマにしっかり継承されている。

十勝の地で産まれた内発的な自立の経営精神が、時を経て今ヨーロッパの地で生き抜くベルギーの琴線に触れたのだと思いをもぐらした。

(十勝毎日新聞「耕土興論」2022年10月16日)